報告概要２　企業倫理問題における日韓比較
－「世間」からのアプローチ－

中川圭輔

1. 研究目的

近年、韓国の躍進が叫ばれて久しい。スイスに本部を置く IMD（国際経営開発研究所）が毎年発刊する『World Competitiveness Yearbook』によると、韓国の国際競争力は 2009 年の 27 位から 2010 年には 23 位へと着実に順位を上げた。（一方、日本は 17 位から 27 位へと順位を下げた。）また、2010 年上半期には、日本の大手ビジネス誌がこぞって韓国特集を組み、「躍進」、「最強」、「実力」の名の下、韓国の成長要因を明らかにしようとした。とりわけ、韓国では、財閥と呼ばれる企業グループの影響力が強く、財閥はこれまで韓国経済の牽引役を担ってきた。さらに、その財閥の躍進を支えているのがオーナー体制であり、オーナー経営者の強力なリーダーシップが躍進の最大要因だとされてきた。

他方、その裏で数多くの企業不祥事も発生している。韓国の企業不祥事の諸特徴をまとめれば、以下 3 点に収斂される。①政財界に絡む事件が多いこと。②オーナー経営者自らが事件にコミットし、やがて逮捕されるに至ること。③オーナー経営者が逮捕されたとしても、その強大な権力と莫大な保釈金により身柄を解放され、再びオーナー職へと復帰できることである。つまり、オーナーの強力なリーダーシップが上記のような不祥事発生の一因ともなり得るわけである。

そこで、本研究では、なぜ不祥事を犯したオーナー経営者が復職可能なのか。そして、なぜ韓国社会はオーナー経営者の復職を受け入れるのかという問題意識の下、「世間」と「社会」をキーワードに、文化的要因から企業倫理問題の日韓比較を試みたい。

2. 韓国の経済発展と企業倫理問題

周知の通り、韓国は政府主導型の経済発展を遂げてきた。「官治金融」の名の下、政府が市中銀行を管理・統制することで、財閥に対し政策金融を実施してきた。それにより、政財界はしばしば政経癒着と揶揄されながら双方の関係を築きあげた。上述した企業不祥事の諸特徴にもあるように、政財界に絡む事件が多数発生してきたのも、このような蜜月関係に由来する。

歴史を遡れば、政財界に絡む最初の事件は、1951 年に起きた重石ドル事件に辿り着く。当時、韓国は重石（タングステン）を輸出し、これにより多くの外貨を稼いでいたが、その外貨は復興資材の輸入にだけ使用が許可されていた。ところが、時の李承晩政権がその規定を変更し、外貨を特定の商社へと配分するようになった。商社はその外貨で韓国内に不足していた肥料や食糧を輸入し、市場相場以上の価格でこれらを販売することで不当な利益を得た。そして、その不当利益の一部を李政権へ政治資金として還元するようになり、

ここに政経癒着の構図が出来上がったのである。

その後、1961 年に成立した朴正熙政権は、李政権下で不当利益を得た企業家たちを次々と断罪し、「不正蓄財処理者」として逮捕するに至った。同政権はこれに加え、ベトナム戦争による特需や日韓国交正常化に伴う賠償金により、経済発展のための資金力獲得に成功した。そして、60 年代半ばから 70 年代後半にかけて韓国経済は高度成長を果たすことになる。しかしながら、政権樹立当初は清廉潔白を謳っていた朴政権も、末期になると不正腐敗が横行するようになった。そして、1979 年には側近による朴正熙暗殺事件が発生し、これにより長きにわたる開発独裁体制に終止符が打たれた。

暗殺事件後、全斗煥が政権を引き継ぎ、80 年代半ばまで軍事政権が続いた韓国ではあったが、1987 年 6 月 29 日に念願の民主化が実現する。さらに、翌 88 年にはソウルオリンピックを開催し、韓国は世界に向けてその成長ぶりをアピールするに至る。他方、この 80 年代は、国内最大の巨額手形詐欺事件である張玲子事件が発生するなど、財閥グループによる脱税や不正取引事件が相次いだ時代でもあった。

その後、90 年代に入ると、韓国は一気にグローバル化への道を歩み始める。1993 年、約 30 年ぶりに誕生した金泳三文民政権は、OECD への加盟を最大目標に掲げた。そして、1996 年にはその念願が叶い、日本に次いでアジアで 2 番目の OECD 加盟を果たす。しかしながら、翌年にはアジア通貨危機が韓国を直撃し、国家経済は破綻寸前に陥った。そして、1998 年には IMF の管理体制下へと入り、コンディショナリティに基づく再建が図られるようになった。このような激動期においても、財閥を中心とした不正事件は続発した。中でも、盧泰愚大統領の側近による贈収賄事件や金泳三大統領の次男による斡旋収賄・脱税事件が明るみになるなど、政財界の不正事件は終息の気配を見せなかった。

続く 1998 年から 2008 年までの 10 年間、韓国は金大中、盧武鉉の革新政権を迎える。両政権は財閥に対して次々と規制を強めていったが、この間、企業不祥事も従来とは異なる様相を見せ始める。それは、大手財閥のオーナーが逮捕・検挙される事件が目立ち始めたことである。例えば、2003 年には SK グループの崔泰源会長が背任事件で逮捕された。2006 年には現代自動車の鄭夢九会長が横領・背任事件で同じく逮捕された。その後、2008 年に保守政権である李明博政権が樹立すると、国策として次々と FTA 戦略を打ち出した。米国との FTA 締結を皮切りに、インドや EU との FTA を表明し、輸出志向経済に拍車がかかるようになった。そのような中で、2008 年には、韓国最大財閥である三星の李健熙会長が、元顧問弁護士の内部告発をきっかけに裏金問題で逮捕された。

以上のように、2000 年代に入って SK や現代自動車、さらには三星のオーナー経営者までもが検挙される事態にまで発展したが、ここで驚くべきことは、いずれの会長も検挙され、実刑判決が下された後であっても、短期間のうちにオーナー職へと復帰しているということである。例えば、SK 会長は 2003 年 6 月に懲役 3 年を受けたが、同年 11 月には会長職へと復帰している。また、現代自動車会長も 2006 年 4 月に懲役 3 年を受けるものの、同年 7 月にはしっかりと復職を果たしている。その後、両会長には懲役 6 年の実刑判決が下

されるが、ちょうどこの時期に「光復節」が開催され、両会長とも大統領の赦免対象に選ばれた。これにより、彼らの実刑そのものが白紙撤回されるに至っている。さらには、三星の会長についても、後に大統領赦免により刑の執行を免れている。

同時期、日本においても組織のトップが逮捕される事件が相次いだ。2006 年のライブドア事件や村上ファンド事件は記憶に新しいことだろう。日本において、社長職にある者が違法行為を犯した場合、再び元の職へと復帰することは不可能に近い。なぜなら、日本には「世間」の厳しい眼が存在するからである。しかし、韓国では短期間のうちに、オーナー経営者の復職が実現する。しかも、大統領赦免により実刑も撤回されている。なぜ韓国ではこのようなことが許されるのだろうか。韓国には「世間」の眼が働くのだろうか。このような疑問の下、「世間」と「社会」からさらなるアプローチを試みた。

3. 文化的アプローチー「世間」と「社会」

日本で「世間」が登場したのは、古くは 6 世紀の奈良時代の頃とされる。日本最古の和歌集である万葉集に「世間」の文字が記されているという。一方、「社会」が登場するのは、明治時代に入ってからである。1877 年に西周（にし・あまね）が「Society」を「社会」、「Individual」を「個人」と訳出することで、これらの言葉が生まれた。それゆえ、日本では「社会」は新参者であり、これまで「世間」が長い間支配的であったと見られる。他方、かつて西欧においても「世間」は存在した。しかし、11～12 世紀頃にキリスト教が普及したことで、神との対話の中で「個人」が芽生え始めた。その後、確立した「個人」たちが集まって「社会」を形成するようになった。

では、韓国においてはどうなのか。辞書で調べたところ、韓国にも「世間」や「社会」に相当する言葉が存在する。そこで、様々な事例をもとに日韓比較を試みた。第 1 の例として、TV における謝罪会見を挙げる。謝罪会見において、日本では「世間をお騒がせして申し訳ございませんでした」と「世間」に対し謝罪の言葉を述べる。しかし、韓国では「世間」ではなく、「国民」に対し直接謝罪する。（韓国では「世間」を対象に詫びることは皆無に等しい。）

第 2 の例として、ビジネスメールを挙げた。日本の場合、文頭では「いつもお世話になっております」と書き、文末には「今後ともよろしくお願いします」と書いて文章を締める。これは日本人が世間において時間の共有を行っている証であると考えられる。すなわち、過去から現在にかけて「お世話になっている」ことを相手に感謝し、現在から将来にかけて「今後ともよろしくお願いします」と関係の持続を依頼しているのである。いうなれば、日本人は過去から現在、そして将来に向けて、互いに時間の共有を行う。これはまさに「世間」に生きる証明である。（表 1 にある「世間」と「社会」の特徴を参照のこと。）他方、韓国では、文頭の挨拶には「アンニョンハセヨ（こんにちは）」を使用する。そして、文末では「アンニョンヒケセヨ（さようなら）」や「スゴハセヨ（お疲れ様です）」を使用する。これは欧米の「Hello」と「Good-bye」に相当する挨拶に近い。そうであれば、韓国

人は欧米人と同じ感覚にあり、日本人のように時間の共有はしないのだろうか。否、韓国語にも「お世話になりました」や「今後ともよろしくお願いします」に相当する表現があり、様々な場面で実際に使われている。（ただし、日本人ほど上記の表現は多用しない。）

表 1　「世間」と「社会」の比較

世間	社会
➢ 贈与・互酬の関係	➢ 契約関係
➢ 長幼の序	➢ 個人の平等
➢ 共通の時間意識をもつ	➢ 個々の時間意識をもつ
➢ 個人の不在	➢ 個人の集合体
➢ 変革は不可能	➢ 変革が可能
➢ 集団主義的	➢ 個人主義的
➢ 非合理的・呪術的な関係	➢ 合理的な関係
➢ 聖／俗の融合	➢ 聖／俗の分離
➢ 儀式性の重視	➢ 実質性の重視
➢ 排他性（ウチ／ソトの区別）	➢ 平等性
➢ 権力性	➢ 非権力性

（出所）佐藤（2001）、P.97

第 3 の例として、TV における個人の表出を比較した。日本ではアナウンサーが現場のリポーターを呼び出す場合、「現場から中継です」と言うのみであり、リポーターも「はい、現場です」と応答するのが一般的であろう。しかし、韓国ではアナウンサーが「〇〇記者がお伝えします」と記者の名前を必ず読み上げる。そして、名前を呼ばれた記者は報道の最後に「△△ニュース、〇〇です。」と社名と自分の名前を名乗ってその場の報道を終えるのである。さらに、街頭インタビューについても、日韓の違いを見ることができる。日本で街頭インタビューを行った際、インタビューを受けている人の情報は、「30 代女性」といった大まかな表記に止まる。しかし、韓国ではインタビューを受けた人の名前や年齢はもちろんのこと、時に在住の町名まで表示されることすらある。以上 3 つの例をもとに言えることは、韓国では日本以上に「個人」が表出する機会が多いということである。また、日本のように「世間」が支配的というわけではなく、西欧のような「社会」も確立されているのではないかということである。すなわち、韓国には「世間」と「社会」が併存しているのではないかと考えられる。

4. インプリケーション

以上のように、西欧では「社会」が、日本では「世間」が支配的であると指摘した。そして、韓国は「世間」と「社会」の両方が存在することを示唆した。では、韓国では「世

間」と「社会」はどこに存在するのだろうか。筆者はまず対人関係に着目した。対人関係の日韓比較を行うと、日本ではムラそれ自体が閉鎖的であり、ムラの範囲は小さい。その中で、対人関係はミウチ、ナジミ、ヨソモノの三層構造に別れていた。他方、韓国ではウリ（我々）とナム（他人）の二層構造である。とりわけ、韓国はムラが開放的であり、その範囲が広大である。そのため、ウリの結束力が強まり、ウリ以外に対しては排他的な態度をとるようになった。さらに、ウリの構造を詳しく見ると、それは同心円状になっている。最も親しい関係は堂内（チバン）であり、その外側に門中、宗族、同学同郷へと拡散していく。ウリ内の代表的な特徴を挙げてみると、一つは明確な上下関係が守られることである。そのためには、差別的な人間観が存在し、「ヌンチ主義」と言われる機転を利かす行為が求められる。また、ウリの構成員（親族や友人）からの期待に応えることも求められ、これがかえってプレッシャーになる。他方、ナムにおいては、対等な関係が前提とされる。それゆえ、何も臆することなく「個人」の意見を存分に主張することができる。また、期待から解放されることで、より確立された個人として生きることができるのである。

以上の考察をもとに、「世間」や「社会」といった文化的要因から、不祥事発生との関連でインプリケーションを挙げてみたい。それは、ウリは「世間」の特徴、ナムは「社会」の特徴を帯びているように見受けられることである。ここから何が導き出せるのだろうか。それは韓国で財閥を中心とした企業不祥事が多いのは、財閥が家族や親族、すなわちウリで構成されていること。そして、政財界関係も自らのウリの「世間」を作り出し、彼らのロジックで動いていることである。ゆえに、財閥や政財界関係で形成されたウリ内のロジックが過度に行き過ぎると、それが社会問題として世の中に露呈するようになる。これを防ぐためには、ウリ内で作られるロジックに歯止めを利かす何らかの中間組織が求められるわけである。

そこで、重要なのがナムの役割だと考える。すなわち、ウリに当てはまらないナムの中で一定の「世間」を形成し、ナムが政財界や財閥によるウリのロジックを定期的にモニタリングすることが期待される。そのためには、現存する「参与連帯」や「経実連」といった市民団体のさらなる台頭が求められる。また、ネチズンと呼ばれるネット市民の発言力が、韓国の不祥事防止に一役買うのではないかとも考えられる。

～参考文献～

《日本語》

- 阿部謹也（1995）『世間と何か』講談社新書。
- 古田博司（2005）『朝鮮民族を読み解く』ちくま学芸文庫。
- 秀村研二（2005）「チプ、門中と父系意識の変化－韓国のイエ」『アジア遊学』第 74 号。
- 九鬼太郎（2009）『“超”格差社会・韓国～あの国で今、何が起きているのか～』扶桑社新書。

- 小玉敏彦（1995）『韓国工業化と企業集団 - 韓国企業の社会的特質 - 』学文社。
- 佐藤直樹（2001）『「世間」の現象学』青弓社。

《韓国語》

- 郭秀一・韓正和（1992）「戦略経営分野における企業倫理問題」韓国経営学会編『韓国の企業倫理 - 実像と課題 - 』世経社。
- 趙東成（1997）『韓国財閥』毎日経済新聞社。
- ユン・ジョング（2009）「超一流企業の秘密」『大韓民国は道徳的か』東アジア。
- 参与連帯ホームページ(http://www.peoplepower21.org/)
- 経実連ホームページ(http://www.ccej.or.kr/)

《英語》

- O-Yul Kwon(2008), *International Business in Korea : The Evolution of the Market in the Globalization Era*, Edward Elgar.
- Han-Kyun Rho(2007), *Shareholder Activism : Corporate Governance Reforms in Korea*, palgrave.
- IMD *WORLD COMPETITIVENESS YEARBOOK*.
- R.J.House et al（2004）,*Culture, Leadership, and Organizations* : The GLOBE Study of 62 Societies, SAGE Publications.